

「保育者論」の授業による保育者養成学生の学び ーテキストマイニングを使った学生の「保育観」可視化の試みー

佐々木 由美子

Learning of Early Childhood Education and Care (ECEC) Students from The “ECEC theory” Classes

—Visualization of students’ “views on childcare” using text mining—

Yumiko SASAKI

Abstract

The "ECEC theory " was newly established as a subject to learn about the professionalism of childcare providers involved in childcare and support for parents. This subject is required for both the childcare provider training course and the kindergarten teacher training course. The 2018 amendments to the Guidelines for Education and Childcare positioned daycare centers as early childhood education facilities, reaffirming the importance of education for young children. In this day and age, when so much attention is being paid to the state of early childhood education, it is the responsibility of early childhood education course to train competent childcare providers who have the appropriate personality and specialized knowledge a childcare provider, and who are also skilled in childcare techniques. Therefore, this study analyzes how the "view of childcare" held by the students has changed through the specialized study of "ECEC theory. In this study, I used KH Coder (Ver. 3), a free software for text mining, to try to capture the overall trend of students' free descriptions while ensuring objectivity. As a result, it was clear that the students' "view of childcare" changed more professionally through the 15 classes of “ECEC theory”.

Keywords: Early Childhood Education and Care (ECEC) Students, "ECEC theory" Classes, view on childcare, text mining, professionalism

1. はじめに

「保育者論」という科目は、2010年2月、厚生労働省の第5回保育士養成課程等検討会（厚生労働省雇用均等・児童家庭局長：『指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について』）により新設科目として承認された。新設の目的は、現行の「保育原理」に含まれていた保育士の役割と責務、専門性や制度的位置づけ、および多様な専門性を持った保育者との協働などについてより専門的に学ぶためである。特

に、児童福祉法第18条の4「保育士とは、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもつて、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう」における保育士の定義や保育士に求められる資質などを踏まえ、子どもの保育と保護者支援にかかわる保育士の専門性について学ぶ科目として新設されたのである。

この科目は、保育士養成課程と幼稚園教諭養成課程双方で必修とされており、2018年の新カリキュラムへの移行に際して、目標・教授内容を以下の通り

定めている。目標は、①保育者の役割と倫理について理解する、②保育士の制度的な位置づけを理解する、③保育士の専門性について考察し、理解する、④保育者の連携・協働について理解する、⑤保育者の資質向上とキャリア形成について理解する、である。教授内容は、①保育者の役割と倫理 (1) 役割・職務内容、(2) 倫理、②保育士の制度的な位置づけ (1) 児童福祉法における保育士の定義、(2) 資格・要件、(3) 欠格事由、信用失墜行為及び秘密保持義務等、③保育士の専門性 (1) 保育士の資質・能力、(2) 養護及び教育の一体的展開、(3) 家庭との連携と保護者に対する支援、(4) 計画に基づく保育の実践と省察・評価、(5) 保育の質の向上、④保育者の連携・協働 (1) 保育における職員間の連携・協働、(2) 専門職間及び専門機関との連携・協働、(3) 地域における自治体や関係機関等との連携・協働、⑤保育者の資質向上とキャリア形成 (1) 資質向上に関する組織的取組、(2) 保育者の専門性の向上とキャリア形成の意義、(3) 組織とリーダーシップ、である。

近年、少子化傾向や被虐待児童数の増加など、子育て環境の大きな変化に伴って、保育者への期待も高くなっている。保育者は次世代を担う子どもたちの養護と教育を一体的に行うという重要な立場にある。2006年には、教育基本法が改正され、はじめて幼児期の教育の重要性が盛り込まれた。また、2018年の教育要領・保育指針の改正により、保育所が幼児教育施設と位置付けられ、幼児に対する教育の重要性が再確認された。このように幼児教育のあり方が注目されている今日、保育者としてふさわしい人格と専門的知識をそなえ、保育技術にもたけた有能な保育者を養成することは養成校の義務といえる。

特に「保育者論」は、他の科目との連続性が重要であり、保育者としてのキャリア教育・職業教育の視点を取り入れた重要な位置づけの科目であると考えられる。

A 短期大学では、「保育者論」の授業を2年次前期に配置し、その授業内容は以下の通りである。

- ① 保育者とは
- ② 保育者の役割
- ③ 保育者の制度的な位置づけと倫理
- ④ 保育者の専門性と資質・能力：乳児の保育
- ⑤ 保育者の専門性と資質・能力：3歳児の保育
- ⑥ 保育者の専門性と資質・能力：4歳児の保育
- ⑦ 保育者の専門性と資質・能力：5歳児の保育

- ⑧ 保育者の専門性と資質・能力：多様な子どもの保育
- ⑨ 計画に基づく保育の実践と省察・評価
- ⑩ 地域や関連機関との連携・協働
- ⑪ 保育者の資質向上とキャリア形成
- ⑫ 保育の質を向上させるために
- ⑬ 保育者としての子育て支援
- ⑭ 現代社会における保育者の課題
- ⑮ まとめと振り返り

本授業は、講義を中心としつつもアクティブ・ラーニングとしてディスカッションや保育カンファレンスを取り入れ、学生自らが考え、それを他者と共有することで学びを深めることを重視している。こうした方法により、「保育者論」の授業においては、子どもの保育と保護者支援にかかわる保育者の専門性を涵養することを目指している。なお、「保育者論」の到達目標として、①保育者の役割と倫理について理解し、説明できる、②保育者の制度的な位置づけを理解し、説明できる、③保育者の専門性について考察するとともに理解し、説明できる、④保育者の連携・協働について理解し、説明できる、⑤保育者の資質向上とキャリア形成について理解し、説明できる、の5つを掲げている。

先にも述べたように保育者養成の現場では、保育者としての専門性に重きを置き、教育を行っているが、残念ながら現状では保育の専門性が正当に評価されているとは言い難い。野崎(2018)¹⁾は、「一般的に専門職と呼ばれる職業は業務負担が大きい分、その社会的地位や給与は高い。そのため、その専門職への就業を目指す者には厳しい選抜が課せられ、そのことがさらに資質の高い人材の確保を招くという専門職の高度化のサイクルをたどる。一方、保育士は、その専門職としての確立に伴った業務内容の拡大と高度化は年を追うごとに高まっているにもかかわらず、その変化に社会的地位や給与の向上が追い付いていない現状がある。そのため、専門性の高度化とそれに見合う待遇のアンバランスにより、専門性の高度化のサイクルがほとんど機能していない。むしろ保育士不足の現状を克服しようと、保育士資格を持たない者でもある一定の条件を満たせば、保育所等で保育業務を行うことを可能とする規制緩和策の実施など、保育士の専門性の向上とは矛盾すると思われる政策がとられつつある。」と述べている。

大滝(2015)²⁾は、保育者の地位が低い原因として『子ども子育て支援制度』における「保育の受け

皿を広げるため業参入のハードルを下げる方向性」があると指摘している。また、「この政策の根底にあるのは一言でいえば『保育は育児をしたことがある人ならば誰でもできるものである』という認識である」と述べている。そして、「育児≠保育」であると指摘している。

ここでは、「育児≠保育」を裏付ける「非認知能力」育成の重要性について触れてみたい。非認知能力は、近年、幼児期に育みたい能力として注目されている。この非認知能力を OECD は、「一貫した思考・感情・行動のパターンに発現し、フォーマルまたはインフォーマルな学習体験によって発達させることができ、個人の一生を通じて社会経済的成果に重要な影響を与えるような個人の能力」とし、スキルの 3 つの分類として、①目標の達成(忍耐力・自己抑制・目標への情熱)、②他者との協働(社交性・敬意・思いやり)、③感情のコントロール(自尊心・楽観性・自信)を挙げている³⁾。

この非認知能力が注目された契機となったのは、1960 年代に実施された「ペリー就学前プロジェクト」であり、経済的に恵まれない 3~4 歳のアフリカ系アメリカ人の児童を対象におこなわれた教育に関する研究である。この研究では、これらの児童を、幼児教育を受けたグループと受けなかったグループに分け、かれらが 40 歳になるまで追跡調査を実施している。その結果、幼児教育を受けたグループの児童は、受けなかった児童と比較して学習成績が高く、40 歳時点でより安定した社会生活(収入、持ち家率)を送り、犯罪率や生活保護受給率もより低いということが分かった(図 1)^{4) 5)}。

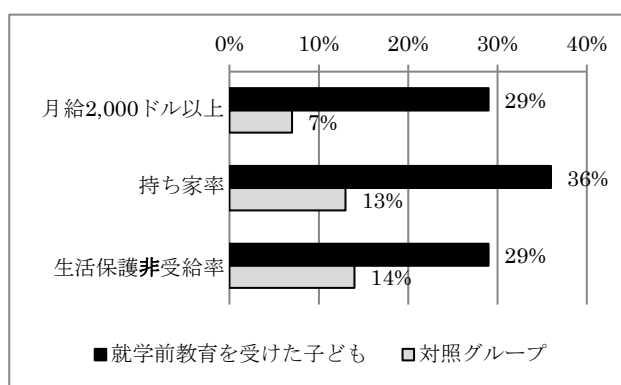


図 1 ペリー就学前プロジェクトの効果
(出所: Heckman(2015) p.30)

この結果から、両者の差を生み出したのは非認知能力であり、その能力が子どもの将来に影響を与え

る要因であることが明らかとなっている。つまり、どのような幼児教育を受けたか、どのような保育者とかわったかによっても、子どもの将来が変わる可能性があるということである。このことから、幼児教育の重要性、専門的知識と技術を持った保育者育成の意義は大きいと考えられる。

そこで、本研究では、「保育者論」という専門的学びにより、学生が持つ「保育観」がどのように変化したのかを分析する。「保育観」とは、保育に対する観念・信念であり、保育に対して保育者自身が持っている考えや、正しいと思っていることを指す⁶⁾。そのため、学びや経験によって変化し、発展していくものである。そのうえで、授業のあり方について検討し、より質の高い保育者の育成を目指したい。

2. 研究目的

保育者養成校では、学生が保育者として従事できるよう幅広い学びを提供している。中でも「保育者論」は保育者としてのセオリーを学ぶ科目である。

本研究では、「保育者論」を受講した 65 名の学生について、第 1 回目の授業課題における自由記述と 15 回目の授業課題における自由記述の中で使われている語を分析し、かれらの「保育観」がどのように変化したのかを明らかにする。学生の「保育観」の変化を分析することで、「保育者論」の教育効果を探ることができると推察される。そこで、これらの分析結果を踏まえて今後の授業のあり方について検討することを目的とした。

3. 研究対象

A 短期大学で、令和 3 年度前期に「保育者論」を受講した学生の第 1 回目および第 15 回目授業課題における「保育観」に関する自由記述を対象とする。令和 3 年度は、新型コロナウイルス感染拡大により、クラウド型教育支援システム(manaba)を使用した動画配信と zoom を使用した双方向型授業を併用して授業を実施した。対象とした自由記述は、manaba の小テスト機能を使用して、学生が入力したものである。

4. 研究方法

本研究では、テキストマイニングのためのフリー

ソフト「KH Coder (Ver.3)」を用い、共起ネットワークを使った分析を実施する。共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語、共起の程度が強い語を線で結んだネットワークとして描き、語と語が互いにどのように結びついているか読み取るものである。語の出現頻度が多いほど大きい円が描かれる。また、その特徴や様相から、自由記述の内容をサブグラフ検出（媒介）という手法で、比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けをおこなう。その結果をグループごとに区別し、テキストデータの内容と照らし合わせながら、そのグループを特徴づけるグループ名を命名し、それぞれについて考察をおこなう。

樋口（2014）⁷⁾は、共起ネットワークについて、語と語が線で結ばれているので、多次元尺度構成法よりも、解釈しやすいとしている。共起ネットワーク分析を行うと、頻出する語句と何が関連付けて捉えられているか知ることができると同時に、強い共起関係ほど太い線で表示され、語の出現数に応じてそれぞれの語（node）を表す円のサイズが変化し、出現数の多い語ほど大きい円が描かれるため、視覚的に語の関連を見ることができるといふ特徴がある。

樋口は、日本語テキスト型データの分析に適したシステムとして KH Coder を作製・公開している。KH Coder は、語の選択にあたり恣意的となり得る手作業を廃し、多変量解析によってデータ全体を要約・提示することと、コーディング規則を公開するという手順を踏むこととによって、操作化における自由と客観性の両立を可能にしている。

そこで、本研究においては、この KH Coder を用い、客観性を確保しつつ学生の自由記述の全体的な傾向をとらえることを試みたい。

5. 倫理的配慮

研究における自由記述使用については、学生に対して以下の説明を書面及び口頭で行った上で同意の意思を確認し、同意が得られた場合に同意書を作成した。説明内容は、①同意は、自由意思であり、同意を拒否した場合であっても不利益等がないこと、②得られたデータは本研究以外で使用しないこと、③個人情報保護のため、個人が特定できないよう配慮すること、である。また、データはパスワードを設定した記録媒体に保管し、5年経過後には同意書を含むすべてのデータを破棄する。

なお、本研究は、A 短期大学研究倫理委員会の審議を経て承認されたものである。

6. 結果

1) 語の抽出と頻出語

それぞれの自由記述の内容をテキストファイルにして、KH coder (Ver.3) で読み込み、テキストから自動的に語を取り出して頻出後の確認を行った。第1回目の授業課題および15回目の授業課題で聞いた「保育観」の自由記述中における頻出語のうち、出現数10以上の語をまとめたのが表1である。

表1 頻出語の比較

| 1回目授業 | | 15回目授業 | |
|-----------|-----|--------|-----|
| 抽出語 | 頻度 | 抽出語 | 頻度 |
| 子ども | 229 | 子ども | 159 |
| 保育 | 109 | 保育 | 98 |
| 笑顔 | 30 | 保護 | 58 |
| 姿 | 29 | 専門 | 43 |
| 保護 | 29 | 大切 | 32 |
| 常に | 23 | 発達 | 26 |
| 大切 | 23 | 援助 | 24 |
| 実習 | 19 | 寄り添う | 23 |
| 出来る | 19 | 子育て | 21 |
| 行動 | 17 | 利益 | 19 |
| 聞く | 17 | 知識 | 18 |
| 一緒 | 16 | 必要 | 18 |
| 寄り添う | 16 | 最善 | 17 |
| 信頼 | 15 | 成長 | 16 |
| 気持ち | 14 | 遊び | 15 |
| 話 | 14 | 環境 | 14 |
| 見守る | 13 | 心身 | 14 |
| 先生 | 13 | 理解 | 13 |
| 伝える | 13 | 活動 | 12 |
| 援助 | 12 | 行動 | 12 |
| 環境 | 12 | 連携 | 12 |
| 持つ | 12 | 自発 | 11 |
| 言葉 | 11 | 支える | 10 |
| 優しい | 11 | 常に | 10 |
| コミュニケーション | 10 | 促す | 10 |
| 安全 | 10 | | |
| ひとり一人 | 10 | | |
| 対応 | 10 | | |
| 明るい | 10 | | |
| 遊ぶ | 10 | | |
| 様子 | 10 | | |
| 理解 | 10 | | |

1 回目の授業課題と 15 回目の授業課題における「保育観」双方に挙げられていた言葉は、「子ども」「保育」「保護」「常に」「大切」「行動」「寄り添う」「援助」「環境」「理解」の 10 語であった。それ以外の語において、筆者は 1 回目の授業課題でのみ出てきた語のうち「笑顔」「優しい」「明るい」の 3 語に、15 回目の授業課題でのみ出てきた語のうち、「専門」「発達」「子育て」「知識」「成長」「遊び」「心身」「連携」の 8 語に着目した。表 1 の網掛け部分が着目した語である。

2) 文脈の要約

KH Coder (Ver.3) の「KWIC コンコーダンス」のコマンドを用い、前述の専門性と関連する語句が、それぞれどのように用いられているのかその文脈を探り、それらの文脈を筆者が以下のように要約した。

1 回目授業課題の「保育観」から

- ① **笑顔**：常に笑顔を忘れず子どもと保護者に接し、子どもが安心できる関わりをする。いつも笑顔で子どもたちに接している。
- ② **優しい**：子どもたちに寄り添うことができる優しい気持ちを持っている。優しく明るい笑顔で子どもたちと過ごしている。
- ③ **明るい**：いつも明るく笑顔を絶やさず子どもとかわる。保育者は元気で明るくはきはきしているイメージがある。

15 回目授業課題の「保育観」から

- ① **専門**：保育者には高い専門性が求められ、それを向上させていく努力が必要である。専門性には、保育に関する知識や技術だけでなく、人間性も含まれる。
- ② **発達**：こどもの健やかな成長と発達を促すということだけではなく、個の発達に応じた援助が大切である。発達の個人差にも留意し、子どもの成長を長期的に見守ることも必要である。
- ③ **子育て**：保護者の子育てに対する悩みや不安の緩和とともに、保護者との連携を大切にしながら、子育てに優しい社会を築く。子どもの最善の利益を優先して子育てを支援する。
- ④ **知識**：専門的な知識に基づいて、ひとり一人の子どもやその保護者に寄り添い、適切な支援を行う。知識不足が子どもの最善の利益を損ねる可能性がある。

- ⑤ **成長**：保護者との連携を密にし、子どもの健やかな成長を促す保育を行う。保育環境を整え、子どもが健やかに成長できるよう支援を行う。
- ⑥ **遊び**：こどもの自発的な活動としての遊びが重要であり、遊びを通じた教育によって、興味関心を喚起する保育を展開する。学ぶために遊ぶのではなく、遊びによる学びを大切にする。
- ⑦ **心身**：遊びを中心とした自発的な活動をとおして心身の発達を促すよう保育する。専門的な知識に基づいて、心身の発達を援助する。
- ⑧ **連携**：地域や保護者との連携を大切にすることはもちろん、保育者同士の連携も大切にし、普段からコミュニケーションを大事にする。保育はチームワークなので、保育者同士の連携も大切にする。

3) 語の共起関係の探索

KH Coder (Ver.3) の「共起ネットワーク」のコマンドを用い、自由記述それぞれの中で、出現パターンの似通った語（すなわち共起の程度が強い語）を線で結んだネットワークを描いた（図 2、3）。なお、分析にあたっては、出現数による語の取捨選択に関しては最小出現数を 10、後期関係（edge）の種類を語一語、描画する共起関係（edge）の選択を上位 60 に設定した。

共起ネットワークでは、強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きい円で描画される。また、語（node）の色分けは「媒介中心性」（それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているかを示す）によるものであり、白から色の濃いものの順に中心性が高くなることを示している。今研究においては、カラーではなくグレースケールを用いて表示している。

図 2 は、第 1 回目の授業課題で聞いた「保育観」を共起ネットワークとして描画したものである。この描画においては、サブグラフ検出（媒介）により、5 つのグループが描き出された。それらは、【保育者の姿勢 1】【保育者の姿勢 2】【実習での学び】【子どもへの対応（養護）】【子どもへの対応（環境）】である。

まず、「子ども」と強くつながる「保育」「姿」「笑顔」「大切」のグループを【保育者の姿勢 1】と命名した。次に「行動」「優しい」「言葉」のグループを【保育者の姿勢 2】と命名した。さらに、「実習」「大切」「伝える」「できる」「見守る」のグループを【実

習での学び】と命名した。そして、「寄り添う」「保護」「援助」「信頼」のグループを【子どもへの対応（養護）】、「環境」「一緒」を【子どもへの対応（環境）】と命名した。

図2の中の「媒介中心性」が高い、つまり一番中心的役割を果たしているグループは、【保育者の姿勢2】、次に中心的役割を果たしているグループは【保育者の姿勢1】であった。

図3は、第15回目の授業課題で聞いた「保育観」を共起ネットワークとして描画したものである。この描画においては、サブグラフ検出(媒介)により、3つのグループが描き出された。それは、【保育者の専門性1】【保育者の専門性2】【子どもの最善の利

益】である。

「子ども」を中心としてつながる「専門」「保育」「知識」のグループを【保育者の専門性1】と命名した。次に、「発達」からつながる「援助」「寄り添う」「心身」「促す」「活動」「遊び」「理解」のグループは、【保育者の専門性2】と命名した。また、「最善」「利益」「支える」のグループを【子どもの最善の利益】と命名した。

図3の中の「媒介中心性」が高い、つまり一番中心的役割を果たしているグループは、【保育者の専門性1】、次に中心的役割を果たしているのは【保育者の専門性2】であった。

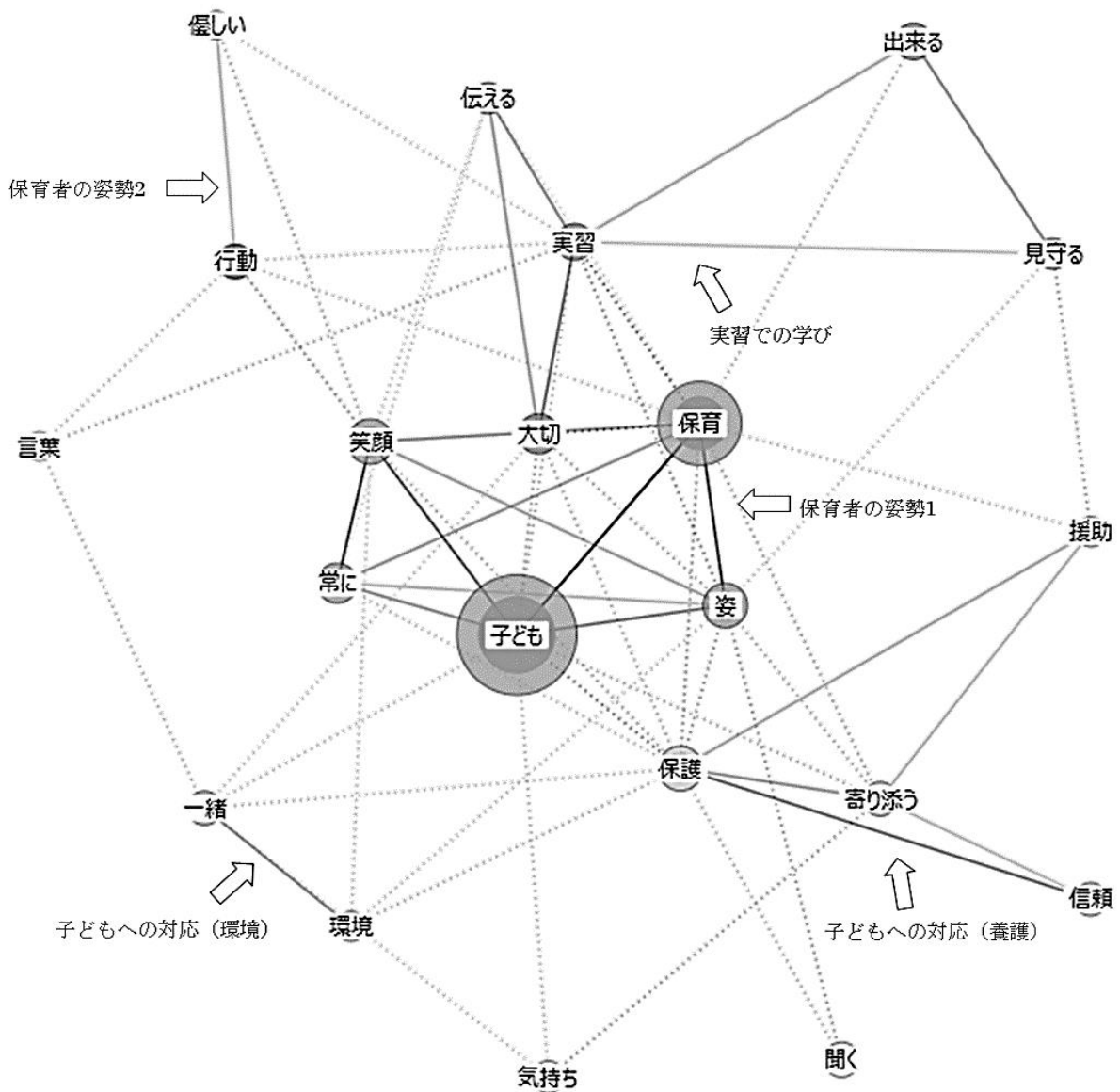


図2 1回目授業課題の「保育観」に関する自由記述

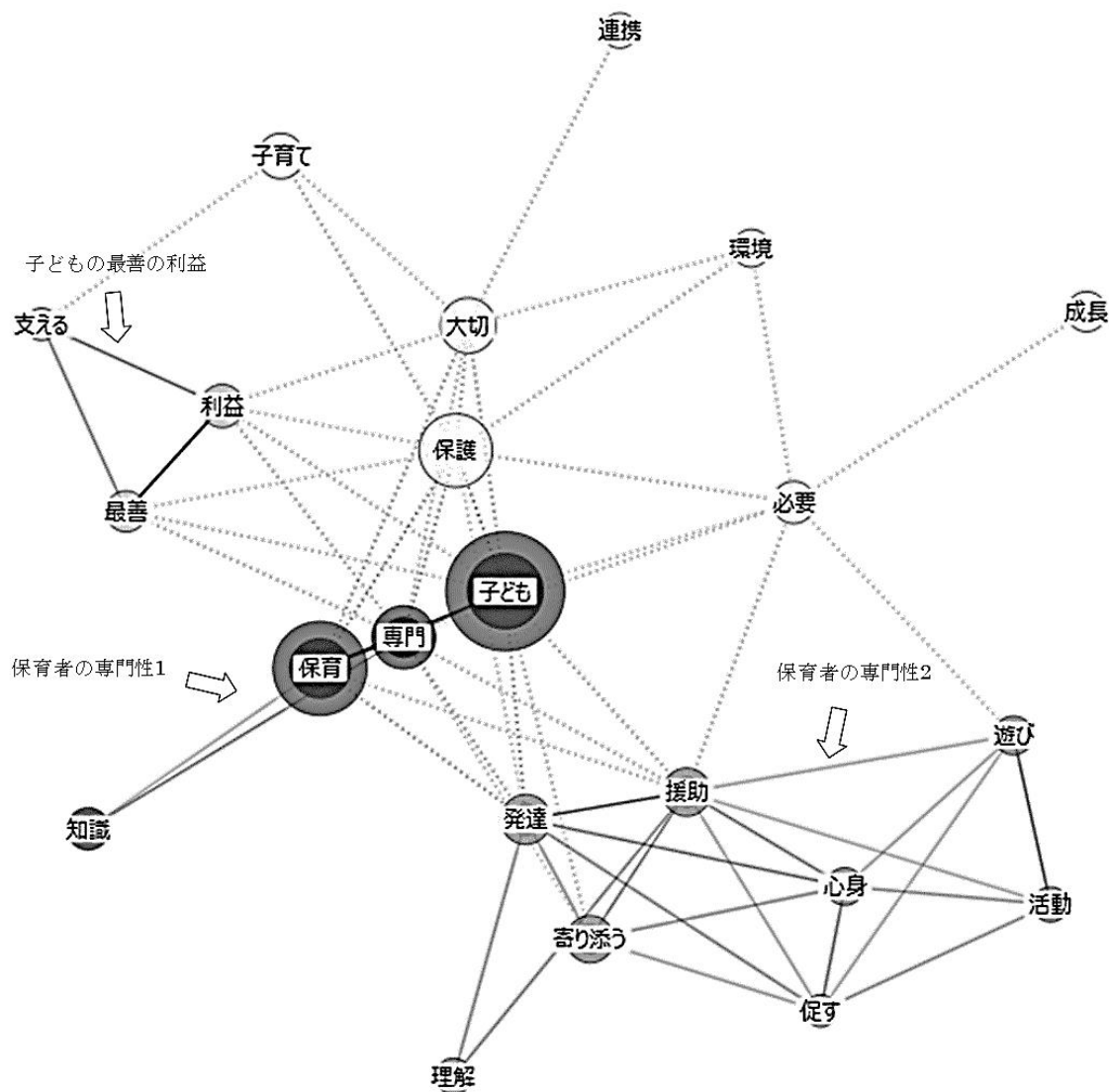


図3 15回目授業課題の「保育観」に関する自由記述

7. 考察

表1のとおり、出現頻度の一番多かったのは、1回目、15回目課題における記述の双方とも「子ども」であった。また、2番目は双方とも「保育」であり、1回目授業課題においても、15回目授業課題においても、学生が「保育観」として使用した語は、圧倒的に「子ども」「保育」が多いということがわかった。しかし、3番目以降になると、1回目と15回目授業課題の自由記述内容に大きな変化が見られた。1回目の授業課題における自由記述の中では、「笑顔」「優しい」「明るい」など、保育者の姿を

捉えているのに対し、15回目の授業課題においては、「専門」「発達」「子育て」「知識」「成長」「遊び」「心身」「連携」など、専門的な語が多く語られていた。その変化は、共起ネットワーク図によって鮮明に捉えられている。

図2、3を比較するとわかるように、その中心には「子ども」のおおきな円が描かれているが、その円の色に着目すると、図2の「子ども」は薄い色で描かれ、図3の「子ども」は濃い色で描かれている。つまり、1回目授業課題の記述よりも、15回目授業課題の記述に見られた「子ども」という語のつながりの方が中心的役割を果たしていることがわかる。

また、「子ども」とつながるグループの語にも大きな変化が見られた。1回目授業課題の記述では、「子ども」とつながっていたのは、「保育」「姿」「笑顔」「常に」「大切」であり、保育者を見てイメージしたものと捉えられた。したがってこれを【保育者の姿1】と命名した。一方、15回目授業課題の記述では、「子ども」とつながっていたのは、「専門」「保育」「知識」であり、知識と専門性をもって子どもの保育にあたりと捉えられた。したがってこれを【保育者の専門性1】と命名した。

図2において、中心的役割を果たしているグループは「行動」「優しい」「言葉」がつながる【保育者の姿勢2】であり、これも保育者の姿をイメージするにとどまっていると考えられる。その他の語をみても、「寄り添う」「信頼」「見守る」「一緒に伝える」などの情緒的な語が多く、また、「実習」という語もあることから、自分自身を保育者と捉えているのではなく、実習でかかわった保育者をイメージしているように感じられた。

しかし、図3においては、「発達」「援助」「心身」「促す」「活動」「遊び」「理解」「連携」などの専門的な語が出てきている。これらは、【保育者の専門性2】であり、授業内容の理解を反映していると推察される。たとえば、「子ども理解」「心身の発達」「遊びをとおした保育」「発達を促す」「保護者との連携」などは、授業の中で多く取り上げたキーワードである。

以上のことから、15回の授業をとおして学生の「保育観」は、より専門的に変化したことが明らかとなった。したがって、「保育者論」の授業には一定の教育的効果があったと考えられる。

しかしながら、A短期大学は2年次前期に3週間の教育実習が行われており、令和3年度も授業期間中に実施されている。学生の実習前後の変容については多くの論考があり、松永ら(2002)⁸⁾は、学生は実習前には「子ども観」や「保育観」を「かわいい」「母親がわり」など情緒的で理想化したイメージで捉えていたが、実習後には「個別性」「有能性」というようにイメージを変化させた、と述べている。

このことから、学生の「保育観」の変化は、3週間の教育実習での経験も影響していると考えられる。そのため、今後は実習による変化を捉えるとともに、実習との相互作用についても検討していきたい。授業内容については、より学生にわかりやすい伝え方を、学生自身が自分の保育観について考え、自分

自身の保育観を見つめなおすためのディスカッションや、保育カンファレンスを充実させ、今後も授業改善に努めていかなければならない。

8. おわりに

子どもの最善の利益を優先することが保育の責務であるということを踏まえると、保育者には多くの役割と高い専門性が求められることは言うまでもない。神長(2015)⁹⁾が、「幅広い社会的視野と、乳幼児期から児童期、青年期をも見通して人間の発達についての深い理解に基づく、より高度な専門性が求められる」と述べているように、これからの保育者に求められる役割は大きい。

一方で山本(2017)¹⁰⁾は、「保育者養成課程に入学してきた学生は、大学入学当初では、保育・幼児教育は楽しく、しかもたやすいと捉えている学生が多い。」と述べている。そして、「専門的な学びが始まると、保育所保育指針等の存在や保育過程・指導計画等々、子ども達との日常の遊びでは見られなかったものが無限に存在していたことに初めて気づき、啞然とする学生がいる。」としている。

A短期大学にも、山本(2017)¹¹⁾が示唆したように「子どもが好きだから自分は保育者に向いている、保育の仕事は楽しい」と考えて入学してくる学生が多い。しかし、専門的な学びをとおして「子どもが好きだけで務まる仕事ではない」という認識に変化し、「保育は難しい」となる。すると、その時点で保育者になることを諦める学生も出てくる。特に2年間で学びが完結する短期大学においては、高い専門性の涵養は至難の業と言わざるを得ない。

しかしながら、幼児教育のあり方が注目されている今日、保育者としてふさわしい人格と専門的知識をそなえ、保育技術にもたけた有能な保育者を輩出することが保育者養成校には求められている。したがって、2年間の限られた時間の中で、いかに専門性を涵養するか、そのための授業のあり方を検討していくことは、保育者養成校に課せられた責務であろう。

今回の調査結果から、「保育者論」の授業には、一定の教育的効果が認められたが、今後も授業のあり方を検討しながら質の高い授業を展開し、専門性をもった保育者を育てていきたいと考えている。

引用文献

- 1) 野崎秀正・他 8 名「保育の専門性向上に伴う保育業務の変化の実態と課題」保育科学研究 9 pp52-65、2018
- 2) 大滝世津子「保育者の社会的地位向上と我が国の発展との関係に関する一考察」第 1 回サクセス保育・幼児教育研究、99 I -13、2015
- 3) OECD(編), ベネッセ教育総合研究所(企画), 無藤隆・秋田喜代美(訳), 『社会情動的スキルー学びに向かう力』明石書店 56, 2018
- 4) Schweinhart, Lawrence J. Lifetime effects: the High/Scope Perry Preschool study through age 40. No. 14. High/Scope Foundation, 2005.
- 5) ジェームス・J・ヘックマン(著) 古草秀子(翻訳)『幼児教育の経済学』東洋経済新聞社, 2015
- 6) 山本佳子「保育者論が学生の「保育観」にどのような変化をもたらしたか」中国学園紀要 16、pp205-211
- 7) 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版, 2014
- 8) 松永しのぶ・坪井寿子・田中奈緒子・伊藤嘉奈子「保育実習が学生の子ども観、保育観におよぼす影響」鎌倉女子大学紀要 9 pp23-33
- 9) 神長美津子「専門職としての保育者」保育学研究 53 (1) pp94-103、2015
- 10) 前掲 6)
- 11) 前掲 6)

